

シクラメン

市川茂子

見るかぎり雲一つなく冬の陽はわが生日の頭上を照らす

冬至よりひと日遅れて入るユズ湯常変りなく老いのたつきは

鈍色の空は静かに暮れてゆく新たなる年へ時刻みつつ

生垣の山茶花などが払われて住宅街は塀高くなる

古き家解体されて新築の立て看板を見つつ通りぬ

九十歳生きる覚悟と死する覚悟天に放ちて初日を仰ぐ

初春の陽ざし入りくる大鉢のシクラメンの生气わが部屋に満つ

家内に春の陽入りて友のくれし大鉢の赤きシクラメン映ゆ

十年に一度の寒波とう予報その夜は風をともないて冷ゆ

晴れ渡る空に蕾をかざしつつ辛夷一本崖ふちに立つ